火花 NO.3 '69.5.20
共産主義同盟 関西地方委員会

ソビエト運動のあらゆる戦線での開始にあたり
党の理論的再武装を勝ちとれ！

学生戦線の分野では、東大安田決戦から全国へ試験止まり争を引き抜き、一方労働戦線においては、塩水港精糖工場閉鎖実力阻止斗争を引き抜くなかで、わが同盟の影響力は非常に拡大している。とくに学生戦線における全共斗運動の関西における定着と、労働戦線における労働者共斗会議の結成は、70年にいたる階級斗争の組織形態を学生戦線において確立したことを意味しており、わが同盟の活動分野は飛躍的に拡大しようとしている。そして、4月に入って学生戦線が新入生を迎え、労働戦線が春斗に突入するなかで同盟の全力量をあげての活動が要請されるであろう。この階級斗争の再度の高揚の直前にあたり、まづもってわれわれは、同盟の組織を理論的にも強化し、大衆斗争の高揚にのりこえられることなく、われわれの階級的任務をはたしてゆかねばならない。

われわれは、現局面におけるわが同盟の理論的、組織的強化を一般的に提起しているのではない。それは8回大会においてはソヌイエト運動という言葉でしか提起しえなかった課題が、今日学生戦線における全共斗運動と労働戦線における階級的労働運動の一組織形態としての労働者共斗会議運動として具体的に展開されはじめたことであり、それゆえ、1969年初頭において鮮明にあらわれたこれらの運動形態に対する評価を行い、われわれの綱領次元の内容を豊富化してゆかねばならない。この作業の第一歩として、まず、この間の斗争の総括を通じて、問題点を明らかにしよう。

〈敵階級の70年代階級斗争に対する治安対策の戦略〉

昨年10、21～11、7を境にして、権力と我々との力関係は、それ以前の段階とは大きく変化した。実感的に言うならば、一昨年10、8から昨年10、21の過程は、局面での変化はあるにしても全体として、実力斗争が宣言の予想を越えて展開され、権力の治安対策は、実力斗争部隊の後手後手となっていた。だが、11、7を皮切りに訪れた事態は、宣言の対応が非常に早く、かつ非妥協的であることである。われわれは、この権力と我々との力関係の変化を、権力が、70年代階級斗争に対する治安政策の戦略的展望を確定したことに求めなければならない。

次に、この権力が確定した治安政策の戦略的展望の内容を明らかにすることである。それは、われわれが昨年の時点で提起していた実力斗争部隊と大衆との切断、そして、労働運動からの反戦派のパージといった内容につきるものでは決してなく、もっと深い、徹底した内容で展開されようとしている。それは、総評・社会党の労働組合運動に対する真向からの攻撃であり、改良的、民主主義的斗争に対する暴力的制圧として準備されようとしている。

では、権力側は、何故こうした治安政策を採用したのであろうか。それは、日帝の現行支配体制が、相対的に低水準な事業費の支出という条件にもとづきながらも、資本蓄積が進められたことによる。すなわち、日帝の復活膨張は、政府的になされており、無政府的な産業と社会の発展が過去においてはそれ自体日帝の強みであったが、今日の時点では明らかに拘束に転じはじめていることである。われわれはこの内容をすでに帝国主義的全社会的再編として位置づけてきたが、この内容が、単なる再編では決してなく、現体制の解体から再編へといったダイナミックな過程をも可避としていることである。

すなわち、教育においては、現行大学制度の解体し、大学院大学・専門大学の新設が権力の意図するものである。

また非生産部門においては、社会性を抹殺し、独占本位の交通運輸通信体系の確立がおし進められている。一方生産部門においては、中小企業の下請化、企業の統合廃止が進められ、大企業においても合併が進められている。そして、その解体－再編の動きは、行政、官僚組織にもひんでいる。そして、重要なことは、この解体再編の過程が、巨大な大衆の不満を生み出していることである。とればかりか、部分的にはどの大衆の不満が、実力斗争部隊にけん引され、実力斗争部隊のヘゲモニーのもとに、現体制の解体が進められようとしていることである。

帝国主義的全社会的再編が、現体制の解体－再編へと進むことは、自然発生的になされるわけではない。この解体－再編というダイナミックな過程は、むしろ実力斗争が登場したが故にそうなるのであり、実力斗争が引きだしたものである。いいかえれば、現体制を帝国主義的に再編しようとする権力の志向が、実力斗争部隊によって阻まれる時、そのとき始めて事態は、権力による現体制の解体から再編成という過程をたどらせしめ、その対極に、広汎な大衆の実力斗争部隊への結集をもたらすのである。そして、権力による現体制の解体と実力斗争部隊による現体制の解体が一個二重の関係として進行し、社・共が現体制派としてその中間に浮ぶのである。

「史的過程に則して言うならば、日大・東大斗争にみられた大学解体のスローガンの下での全共斗運動が、この権力側による現体制の解体－再編というダイナミックなパターンを作りあげた。と同時に、この斗争は無決のつかない妥協のありえない斗いに転化した。街頭における実力斗争の質が、教育制度の中に根づき始めた。このことは、権力にとっては弱い兆である。権力は、帝国主義的全社会的再編をおし進めるなかで、実力斗争の質が、あらゆるところに根づく可能性があることを予想した。かくて、権力の治安政策の戦略は、全学連・反戦の排除にとどまらず、総評や、民主々義的斗争への暴力的制圧へと工スカレートせざるをえないのである。

〈ソビエト運動論の具体化〉

議会制民主主義体制のもとでの、帝国主義の専制支配への移行は、現代帝国主義の危機の深さを物語っている。だが、巨大にして強力な暴力装置と、有能にして強力な官僚軍を持った現代の帝国主義国家は、経済的危機から政治的危機への自然発生的発展を押し止める力量をたっている。（フランス五月革命）しかし、現在、政治・経済の矛盾はたはだ民主主義体制の機能を麻痺させ、暴力による統治へと転換が迫られてくるなかで、労働者階級の政治的成長が進んでいる。

この歴史的階級斗争に対し、われわれは、国際主義と組織された暴力をじそに、ソビエト運動の展開を主張してきた。この路線は、議会制民主々義体制のもとでの帝国主義の専制の時代における唯一の正しいものであることがますます明確になっている。

ソビエト運動の観点は、今日の階級斗争が労働組合やその他の大衆団体に荷われるのではなく、既成の組織から自立した機関によって荷われてゆくことを意味していた。すなわち、権力斗争の時代に突入する以前の段階から、ソビエト型組織が斗争を荷ってゆかねばならないと想定したことである。

このことは、現代帝国主義の危機の深さがもたらすところの、自然発生的に形成される経済社会体制をたえず解体再編せずにはおかない国家独占資本主義の時代の大衆斗争の原則として、確認されねばならない。

今日、国家独占資本主義の矛盾は成熟している。労働組合をはじめとする合法的大衆組織の裏に権力の直接支配が貫徹され、合法組織が力を失うなかで、どの党派も「労働者権力」とか「二重権力」とかを主張せざるを得なくなってきている。だが、今日の大衆斗争のなかに「労働者権力」や「二重権力」の萌芽を発見して、その革命的意義についていくらおしゃべりをしたところで現実の斗争を進めることはできない。むしろ今日の大衆斗争は権力斗争の前段階から「労働者権力」や「二重権力」状況のごとき組織形態をとるのである。

問題は、このような労働者権力や「二重権力」状況の上での組織が形成されながらも、それが自然発生的に放置されるならば、人民戦線派の御見物になるということである。

したがって、われわれがすでに確認しているように、ソヴィエト運動の内実は、政治権力の奪取の問題としてとらえられねばならず、自然発生的に形成される「労働者権力」や「二重権力」状況＝ソヴィエトMに対し、「労働者管理」や「生産管理」というスローガンを与えることは生くのあやまりである。

いいかえれば、われわれは、権力闘争の前段階で発生する「労働者権力」や「二重権力」状況を、帝国主義権力のわくという政治的統一戦線の形成という観点から指導してゆかねばならない。

ところで、この場合問題になってくるのはソヴィエト運動の自然発生的側面である。われわれがソヴィエト運動に対し、帝国主義社会の戦略を与え、戦略部隊を提供するとともに、ソヴィエト運動総体を反帝統一戦線に獲得してゆかねばならないことはすでに明らかになった。残された問題は、個人の、分散的に開始されているソヴィエト運動　それ自体のもつ要求に対する分析である。

先にも述べたように国家独占資本主義の特質は、無政府的に展開される資本制社会を、たえず政治的に再編してゆかねばならないのである。今日、東欧諸国が登場することによって、この再編の過程が、解体―再編（統合）というダイナミックな過程へと深化されてきている。すなわち、国家独占資本主義の支配はボーナに解放された生産手段の社会化を一挙的に独占体の私的所有に帰するものであるが故に、労働者階級やその他の階層をますます反独占の側へおいやってゆく。この国家独占資本主義の特質は、自由化、国際競争をひかえ、より一層顕著になってくる。

労働者人民は、もはや帝国主義的に再編されつゝある現体制に対する幻想をすてようとしている。現体制の解体が、労働者人民のスローガンになる。

一方、権力にとっても、現体制はより一層帝国主義的に改編されねばならない。それはかりか、現体制のなかに現体制の解体を叫ぶ部隊が形成されるとき、権力も又、現体制の解体を志向せざるを得ない。かくて、権力は従来のように合法的組織や、民主々義体制の幻想を与えることによって大衆を集約するという旧来の手段をとることを得ず、ここに合法的大衆組織を中心として権力と東欧諸国闘争部隊との二重権力状況が展開するのである。したがって、今日の階級闘争がブラックした構造をもつ以上、改良的、民主々義的闘争においても、労働者、人民のスローガンは、賃上げや反合や権利といった従来の労働組合運動のスローガンでは結集しえず、帝国主義新体制解体の思想性をスローガン化することがとわれており、革命的スローガンが要求されているのである。

人党の任務

二九年階級闘争の特徴には、ソヴィエト運動があらゆる戦線から開始されはじめたことである。それは、このような新しい質の階級闘争の時代に、党はどのような任務を果さねばならないのであろうか。まず、我が同盟七月大会綱領をソヴィエト運動全体を包括した綱領にまで高めることである。わが同盟の綱領は、主として中央権力闘争の内容に見られた戦略戦術を中心としていた。全人民的ソヴィエト運動の開始の時期にあたり、革命のための戦略戦術から更に、革命に対する世界観の確立と、労働者人民がソヴィエトMの中で結集すべき諸要求の内容を明確にすることである。

次に、戦略的な組織方針の確立が迫られている。すなわち、一たんソヴィエト運動の型が形成されるならば、あらゆる階層にまで二の運動は波及してゆく。われわれは諸階層分析の中で権力の諸階層の解体再編のプランと諸階層の矛盾の成熟を分析し、戦略的観点からの組織活動にとりくんでいかねばならない。

(2) 春闘に対するサンワソ

ソヴィエト運動は、党生戦線における春闘運動としてすでに開始されている。労働運動の分野では、ソヴィエト運動の観点からのスローガンを階級的労働運動として提起した。今日、問われているのは、春闘においてどのように階級的労働運動を展開するかである。

国鉄の山ネコストライキが、運賃ねあげ反対で斗われた裏には、東鉄局三分割案に反対する反合ストの推進と、一方、社会党の運賃値上げ阻止→国会解散へという路線との交叉の中で突入したといえる。だが、われわれは運賃値上げ反対で結集した大衆の状況を社会党的立場からではなく、そこに階級的労働運動の萌芽があることをみぬかねばならない。すなわち、国鉄労働者の自然発生性は、賃上げ闘争や反合といった即物的な要求ではなく、自らが総評運動の背骨であるという意識と、帝国主義的交通体系への再編に対する帝国主義的交通体系解体のスローガンへの突破口をみいだし、斗争に決起していったのである。

いま、総評運動の背骨をなす公労協に対し、合理化を軸とした組合破壊の攻撃がかけられてきており、この帝国主義の攻撃と対決するための運動主体の形成が緊急の課題として問われているのである。われわれの戦線においても、すでに活動家に対するパージと労務管理を軸とした合理化として進められようとしている。労働組合とは相対的に独自な運動主体の形成と、それにけん引された労働組合運動といった相違を、今春斗のなかで形成してゆくことが必要である。その際要求されているのは、旧い労働組合運動の様式にとらわれることなく、今日の公労協労働者の要求を帝国主義的交通、通信体系の解体という思想性にうらうらされた斗争スローガンにまとめ、独自的斗争集団を形成してゆくことである。

もちろん、主体的勢力がなければ、民同が決定したワクの内での運動に終始せざるをえないが、われわれとしては、拠点をメメに決定し、それに全力集中する方向でとりくむ必要がある。

(b)、労働者共斗会議運動の展望

労働者共斗会議は、全学連、反戦の戦略部隊にけん引された、階級的労働運動を斗いとる組織として、形成された。それは、労働運動のあらゆる変革をとりあげ、実力斗争へと爆発させてゆくなかで、労働運動の内から組織された暴力部隊をつくりだしてゆかねばならない。

今日労働者共斗会議の戦場は、中小企業であるが、それは春斗のなかで、官公労へと波及してゆかざるをえない。そして労働者共斗会議運動は、あらゆる地区に斗争拠点をつくりあげ、いずれは全国組織としての体制を確立し、労働者階級の階級的再結集を表現する組織へと発展してゆかねばならない。

(c)、反戦青年委員会

従来、われわれのもとの唯一の戦略部隊として反戦青年委員会があった。今日われわれが共青として戦略部隊を独自に結集してゆく状況においては、地区政治斗争機関としての反戦の役割は新たな重要性をもってくるし、また非常に目的意識的指導が必要である。

すなわち、反戦は、政治課題のすべてに機敏に対応し実践行動を組織するなかで地区大衆を政治教育するとともに、活動家大衆を結集していかねばならない。と同時に地区における全人民的政治斗争の機関であり地区における政治斗争の荷い手である。そしてまた反戦の構成員にとっては、組織活動を経験し、より階級的に鍛えられ、組織者として他の戦線の活動へと配置されてゆかねばならない。その意味からはたえず流動的な組織である。この流動的組織には三つの力が形成される。すなわち反戦機能の中枢部分と、その周辺に結集する大衆と、そして、従来反戦の中核を荷っていたが、他の戦線に配置されている部分である。反戦の大斗争には、三つの力が結合され、日常活動は、前二者によって荷われることになる。われわれは、反戦のこうした特質を十分はあくした上で、計画的な指導を行うと同時に、日常的な街頭行動を絶対に中断させてはならない。

(d)、共青

共青は、われわれの戦線が反戦と階級的労働運動としっかりとつかんでゆくなかでの戦略部隊の役割を荷わねばならない。

(e)、中央権力斗争

次号にて提案する。

(f)、諸階層の斗争に対する指導

ソビエト運動の時代の到来と共に、諸階層が一気に実力斗争に登場する。われわれはこれらの諸階層に対する指導をも計画してゆかねばならない。（以上）